

成文教就説

宮部圓城師説

讀題

諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國
即得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法

第一席 眞俗二諦の本源

眞宗の
根本は
願成就
の文

一 讀題さんだいに備そなへましたは、第十八願成就だいいちじゅうはちげんじゆうじゆうの文もんと申まをして、僅わずかに九句く(唯除五逆誹謗正法の八字は一句である)

四十字じなれども、大無量壽經だいむりやうじゆきやうの肝要かんえうで、釋迦出世しゃかしゆつせの本懐ほんくわい、これより外ほかはない。これ即すなはち宗祖聖人しうそしやうじんが、教行信證けうぎやうしんしゆうの四法ほふを以もつて、淨土眞宗じやうどしんしゆうを開闢かいびやくしたまふ根本こんぽんで、一流りうの他力廻向たりにきゑかうの法門ほふもん、一念發起ねんぱんしき、平生業成へいぜいごふじやう、佛恩報謝ぶつおんほうしゃ、皆みなこの成就じやうじゆうの文もんより流れ出るいづゆるゑ、宗しうの淵源えんげんとも、凡夫往生ほんぶわうじやうの樞要しゆうえうとも、知識傳持ちしきてんぢの佛語ぶつごとも、釋迦發遣しゃかはつけんの勅命ちよくめいとも申もうして、實じつに淨土眞宗じやうどしんしゆうの肝腑かんぷ、甚深微妙じんしんみめうの經文きやうもんであつて、一朝一夕てうせきに

は、話し盡されぬが、九牛の一毛、大海の一滴なりとも、御同行方へ届けたいと存じ、説く拙僧も謹んで御取次ぎをするから、聽く御同行も大切に聽聞して下さい。近來黒住教、天理教、大本教など、澤山宗旨が出来ましたが多くは老翁老婆の話を根據としたものであつて、信するにも足らぬ様なものであるが、それにくらべると、昔からある佛教は確かなるもので、總て各宗ともに、依經分宗と云つて、必ず經論に根據がなければならぬ。華嚴宗は華嚴經、天台宗と法華宗は法華經、眞言宗は大日經、法相宗は解深密經、禪宗は般若經、涅槃宗は涅槃經と、夫經論に據つて、宗を開かれたものである。

總依
別依

二 淨土一家に於ても、先鎮西の十八通に鎮西の宗義を明して、總依一代經別依三經、總依三經、別依觀經、總依觀經別依一句と申して、九品段の、二者深心の一句によりて、開いたが、鎮西の正宗であると申してある。

今これにならつて、當流の宗義を述べて見ると、親鸞更にめづらしき法をも弘

めず、如來の教法を、我も信じ、人にも教へきかしむるばかりなりと、仰せられてあるから、其御據を伺へば、總依一代經別依三經、總依三經別依大經、總依大經別依成就文である。總依一代經とは、御本書には、二十一部の經、七部の論、三十六部の疏釋、合計六十四部より、三百四十餘文を引用あらせられ、別して信卷には、華嚴經と涅槃經とを並べ引いて、信心を御釋あらせられたのは、華嚴經は、一代經の説き始め、涅槃經は、一代經の説き仕舞、始と終とを引き寄せて中間の、阿含も、方等も、法華も、皆この他力の信心を御勸め下さる爲であると顯したまふ思召ゆるゑ、御本書六卷を、淨土眞宗の、一代經と申さねばなりません。然るときは、淨土眞宗の他力の信心を獲得すれば、釋迦一代經の本意にかなふ、廣大勝解の人であるとの御知らせと頂かねばならぬ。

次に別依三經とは、淨土和讃に、大經觀經彌陀經と三經別々に、和讃を御製作あらせられ、又三經往生文類などが、別依三經の御こゝろで、是は三經一致門で、

則ち大經は法の眞實、觀經は機の眞實、阿彌陀經は機法の眞實を合説と、御覽な
 さるゝ御意である。

又次に別依大經とは、經卷の初に、大無量壽經、眞實之教、淨土眞宗と標し、
 御本書六卷の内、眞實の前五卷には、大無量壽經ばかりを引いて、觀小二經を御
 引用なされぬは、三經差別門で、別依大經の思召である。

後に別依成就の文とは、信卷に、横超といふは願成就一實圓滿の眞教眞宗是な
 り、と仰せられてあります。此こゝろを、覺如上人の改邪鈔に、「三經の安心あ
 り、そのなかに、大經をもて眞實とせらる、大經のなかには、第十八の願をもて
 本とす、十八の願にとりては、又願成就をもて至極とす、信心歡喜乃至一念をも
 て、他力の安心と、おぼしめさるゝゆるなり」と仰せられてあります。そこでこ
 の願成就の文の御こゝろさへ、篤と了解せられたなら、一念發起の信心も得られ、
 往生に安心も出來て、報謝の稱名もたしなまれ、人間の道も守らるゝ様になりま

す。改邪鈔に、「生死流轉の本源をつなぐ、自力の迷情、共發金剛志の一念にやぶれて、知識傳持の佛語に歸屬するをこそ、自力をすて、他方に歸するともなづけ、また即得往生ともならひはんべれ」と、仰せられてあります。知識傳持の佛語とは、正しくこの成就の文を、指させられたものである。知識といふを、遠く釋迦如來のことゝすれば、この成就の文は、阿彌陀如來の佛意を、釋迦如來が傳へさせらるゝといふことになる。又近く祖師及び相承の善知識のことゝすれば、釋迦如來の佛語を傳へたまふことゝなる。何れにしても此成就の文が、佛語である。この成就の文は釋迦發遣の勅命である。大經一部は釋迦彌陀二尊の、發遣招喚より外はない。四十八願懇懃に喚ぶと、四十八願はみな阿彌陀如來の御喚聲である。その四十八願の肝要は、第十八願ゆるゑ、彌陀の招喚は第十八願より外はない。

三 其第十八願の意を顯すには、この成就の文に過ぎたるものはない。第十八願

成就で
知れる

は三十字、成就の文は四十字、彌陀の本願ましますとも、釋迦の成就の文がなけ
らねば、阿彌陀如來の佛意を知ることには出來ませぬ。依て信卷の初に、「眞心を開
闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり」とのたまふ、第十八願は五劫の思
案の結晶體で、阿彌陀如來の御誠ありたけ、御智慧ありたけ、御慈悲ありたけ、
結極阿彌陀如來の御意ありたけ、皆納まつてあれども、扉の閉つた藏の様に、直
に聞いても分らぬ故、釋迦如來が、開闡と云うて、藏の扉を開いて中を見せる如
く阿彌陀如來の眞心を開説して御知らせ下されたのが、この成就の文である。
その譯は、先第十八願では、「十方の衆生、至心に信樂して我國に生れんとおも
ひ、乃至十念せんに、もし生れずば正覺とらず」とあるが、その三信十念の往生
は、自力やら他力やら更に分らぬ。夫を成就の文では、扉を開き、「至心に廻向し
たまへり」と説いて、信心の因も、往生の果も、彌陀如來よりの御廻向であると、
御知らせ下されたのである。

然し御廻向とは分つても、如何して頂くのであるか、貰ひ様が知れませぬ、そこで聞其名號信心歡喜と説いて、眞實報土の正因を頂く頂き方は、善知識より本願名號の御謂れを聞く一念に、御與へ下さるのであると御知らせあらせられた。

次に第十八願には、若不生者と往生を御請合ひなされてあるが、其往生は何時定まるか分らぬ、夫を成就の文では、明かに即得往生住不退轉と説いて、聞信一念の時、念をへだてず、時をへだてず、日をへだてず、一念同時に往生は定るぞと、御知らせ下された。

又第十八願では、乃至十念の後に、若不生者とあるから、稱へて後の往生の様に見える。夫を成就の文では、一聲の稱名を待たず、聞信の一念に往生は定まるぞと、御知らせ下された。

そこで念佛の稱へごころは、往生治定の後なれば、助かりたやの念佛ではない、稱へますから助けて下されの念佛ではない、稱へる念佛で連れて行つて下さいの

念佛ではない、稱へてさへ居れば助けて下さるゝであらうの念佛ではない、何でも念佛を忘れぬ様にして、首尾よく参り度いと、杖につく念佛でもない、信心に具はつてある歡喜慶喜の思ひより、稱ふる念佛であるから、御助けありつることのありがたや、御助けあらうすることのうれしやと、喜ぶ思ひのあらはれゆる、慶喜報恩の稱名となるのである。

眞諦門
の肝要

四 この成就の文四十字は、初の三十二文字は眞諦門、後の八字が俗諦門、其眞諦の肝要は、一念發起の信を得て平生業成の安心に住し、佛恩報謝の稱名相續するより外はありませぬ。此三箇條が、第十八願の三信十念若不生者の誓願が、行者の方へ頂かれた相であると論判あらせられたが、龍樹菩薩の十住毘婆沙論の御意である。即ち易行品に「人よくこの佛の無量功徳を念すれば即時に必定に入る。この故に我常に念するなり」とのたまふ。人能念是佛無量功徳とは、第十八願の三信にして、成就の文では聞其名號信心歡喜乃至一念に當る、即時入

必定やうたいとは、即得往生住不退轉そくとくわうじやうぢやうふたいてんにして、若不生者にやくふしやうじやの御誓おちかひが行者ぎやうじやへの方かたへ届こいた相あひである。是故我常念このゆゑにわづねにねるなりとは、第十八願だいじゅうはちがんの乃至十念ないしじゅうねんの念佛ねんぶつにして、歡喜慶喜くわんぎきやうきの乃至ないしの稱名しょうみやうであります。これを祖師聖人そししやうにんは正信偈しやうしんげの中に「彌陀佛みだぶつの本願ほんぐわんを憶念おくねんすれば、自然じねんに即時必定すばちのときひつぢやうに入る。唯能たゞよく常つねに如來にょらいの號みなを稱なへて、まさだに大悲弘誓だいひぐげいの恩おんを報はうすべし」と御示おしめしあらせられた。この四句くの偈文げもんが全くまづた一念發起ねんほつぎ、平生業成へいぜいごふじやう、佛恩報ぶつおんはう謝しゃの三ヶ條でうであります。この三ヶ條でうが眞宗しんしうの肝要かんえうゆゑ故か、覺如上人かくじよじやうにんはこの三ヶ條でうを述べて、最要鈔さいえうせうと名附なづけさせられ、蓮如上人れんじよじやうにんは聖人しやうにん一流りうの御勸化ごくわんげの趣おもきはと標へうして、此三ヶ條このでうを述のべさせられ、また改悔文かいげもんにはこの三ヶ條でうを述のべ、夫それを受けて、この御ことおはり聽聞申ちやうもんまをしわけ候さふらふこと、御開山聖人ごかいさんしやうにん御出世ごしやうせの御恩ごおんと、御示おしめしあらせられた。左されば各方おのくがたは後生ごしやうの一大事だいじを心こころにかけて、善知識ぜんちしきの御化導ごけだうより名號みやうがうの御由おれをよく聽聞ちやうもんして、雜行ざふじやうすて、一心しんに後生助ごしやうたすけたまへと彌陀みだをたのみ、聞名もんみやう信喜しんぎの一念ねんに不可稱ふかしょう不可說ふかせつ不可思議ふかしぎの功德くどくは、至心廻向ししんゑかうと御與おあたへにあづかり、往わう

生は佛の方より御定めなりと安心して、其後は御助けありつることのうれしや、御助けあらうすることのありがたやと、歡喜慶喜の思ひより感謝の念佛諸共に、日送りをなさるが肝要である。

稻川と鐵ヶ嶽

五 先年あの稻川と鐵ヶ嶽が組合したところ、稻川は鐵ヶ嶽よりは一枚強い、出合頭に押し出すか投るか、何の苦もなく勝つ筈であるのに、タヂくとして負かさうになつた。是は何故なれば今日の暮までに、二百圓の金がなくては檀那の顔が立たぬ。「稻川たのむ」、「宜しう御座る」と請合つたところ其工面がつかぬ、處が其檀那の敵手は鐵ヶ嶽ゆるゑ、一番譲つてやつて後で頼まうか、まてく、頼んで聞いて呉れまいかと思案にくれてゐるゆるゑ、所謂「猛奮の孤疑は童子の必至に如かす」といふ風情で、手に透間が出来て鐵ヶ嶽につけこまれ、今や土俵を割りそうになつた危機一髪の處へ、行司が「御最負様より金二百圓稻川關へ」と呼ばる刹那に、稻川は身をひねる、鐵ヶ嶽はあまされて土俵のそとへどつさりと投げ

られた。あまり見事な勝じや故われるばかりの大喝采。行司が扇子にのせ持つて出た金二百圓を、受取つて押頂いた稻川の心地よさ。以上の首尾を女房に聞かせたならばさぞ喜ぶで有らう木戸口より出かけたれば、其處に女郎屋の亭主が居つて、「關取さん御待なさい」と聲をかけた。「ヲ、何か用があるか」、「ハイ最前二百兩はりこんだ御最負が御座るので」、「ナニ御最負の檀那とあれば御目にかゝりた」と、あとふりむげど檀那らしい人も見えぬゆゑと／＼して居れば、女郎屋の亭主がにつこり笑うて、後にある駕籠の引戸に手をかけてグーとあけるなり、稻川は見てびつくり、「ソチャ女房じやないか」、「ハイうちの随分御機嫌克」と、別れの挨拶に稻川はホロリと涙を落し、「何もいはぬが女房かたじけない」。一念發起、平生業成、佛恩報謝にたとへたのであるが、御了解になりましたか。二百圓の工面がつかぬとは、今も知れぬ臨終をとりつめて見れば、後生へ持行く用意は有りますまい。處へ御最負様より二百圓とは、無量の願行を南無阿彌陀佛に

封じ込めて、我を頼め必ず助けるとの仰せ一つで御與へなりと、聞く一念が貰ひ時、鐵ヶ嶽を投げたは稻川なれど、投付けさせたは二百圓の金の力ちや。自力を捨てたは自力ではない、我をたのめの仰せの力ちや。金二百圓稻川關へと聞くなり、暮を待たずして安心の出来た如く、臨終待たず來迎たのます、必ず救ふの勅命の聞得られた一念に、往住一定と安堵の出来たが平生業成。初花は「女房に禮いふ者が何處にある」と申したが、稻川は女房に禮を云うた。なせ禮いうた、サア是は禮いはずには居られぬ。稻川は女房にはかくして居たのに夫を知つて、一年か二年か知らねども浮川竹の勤め奉公に身賣してまで、拵へてくれた此金と知れて見たら、禮を云はずには居られぬ。一年や二年で出来た南無阿彌陀佛の名號ではない、御思案が五劫、御修行が兆載永劫、一方ならざる御辛勞で御成就なされた南無阿彌陀佛。貰はれぬ先は兎も角も、信受の出来たが誠なら、是がまあ御禮いはずに居られうか。ようこそなされて下されましたと、感謝の思ひで稱名相

續するより外はありませぬ。

六 次に俗諦門とは、大體は人たる者の守るべき道である。是に就いても御話し申すべき事は澤山あるが、只今は時弊に對して一箇條丈け御咄を申します。近來人心が悪化して只自利ばかりを計り、良もすれば種々の惡拉手段を回らして、他を害して己獨り利を占めんと汲々たるありさまであるが、是は佛法の主義には叶はぬ。大無量壽經に「世間人民父子兄弟、夫婦室家中外親屬、當に相敬愛して相憎嫉するなく、有無相通じて貪惜するをうるなく、言色常に和して相違戻するなかれ」と御誠めあらせられたことであるから、親となつたら子を愛して子の力になり、子となつたら親を愛して親の力となり、夫は妻を妻は夫を互に愛して、力になり合ひなられ合ひすれば、貧富にかゝはらず一家は安心に、面白く、樂しく喜び、日送りが出来来る。資本家は勞働者を敬愛し、勞働者は資本家を敬愛し、互に爲になり合ひ、地主は小作人を敬愛し、小作人は地主を敬愛して、互に爲になり

なり合ふなれば、其町村は穩かに治まる。上は下を下は上を敬愛して、上下心を一にすれば其國は必ず隆盛に趣くのである。對手を害して己のみを利するは争ひの基で、衰亡を招く源であるから、如何なる甘言を用ひて勧められても、誘惑せられてはならぬ。人を愛するは己を愛するのである、人を害するは己を害するの道理を辨へ、互に怨りをなし、一致和合して人を利すると共に己を利し、自利利他圓滿の地位に進む様共に向上の途をたごりたいものである。

第二席 誰でも来い

諸有衆
生は
誰のこ
か

一 初めに諸有衆生とある四字のこゝろを御取次いたします。この四字は所被の機と申して御目的の人を呼びあげさせられたものである。この所被の機につき、唐の憬興の述文讚には、第十八願に唯除五逆誹謗正法と惡人を除けてあるから上輩である。第十九の願は發菩提心とあるから中輩である。第二十の願は漸く念

誰も彼も残らずに云ふこと

佛を稱ふるばかりの機類故下輩なりと、上中下三輩の機を三願に配當して、第十八願の所被の機は上輩なりと定めてある。そこで法位や玄一などの大徳も、この説に同意せられた。又義寂の大經の疏には、第十八願の所被の機は下々品の惡機である、其證據は觀經下々品の十念と、第十八願の十念と、十念の相が同一故、第十八願の所被の機は下々品の劣機であると申してあります。鎮西では善導大師が九品唯凡どのたまふからは、第十八願は凡夫の爲にして、聖者に通せずといふ。

二 箇様に聖道門の學者や淨土他流では、種々の異説がありますが、夫は夫として置いて、我御開山聖人の思召しを伺ひますに、第十八願所被の機を扱ふに二義があります。此成就の文の上で申せば、「アラユル衆生」と讀む義と「諸有の衆生」と讀む義とがあります。初めに「あらゆる衆生」と讀む時は、本願一乘の大益を顯す平等門の御慈悲の廣大なることを、御知らせ下されたので人天聲聞緣覺菩薩

あります。此御喚聲の聞えたこゝちを唯信鈔文意には「自力をすつといふは、やうくさまぐの大小の聖人、善惡の凡夫みづからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのます、あしきこゝろをさかしくかへりみず、人をよしあしとおもふこゝろをすて、ひとすちに具縛の凡愚、屠沽の下類、無礙光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」とのたまふ。自らが身をよしと思ふ意をすてとは、如何なる聖者でも、彌陀の淨土へ往生を遂げるにつき、我身に出離の善根ありと思つて、往生をはからふ自力の計らひがあつては他力の信心を得られぬ故、報土の往生はかなはぬ。願力成就の報土には自力の信行いたらねば、自力無功と捨て、出離の縁あることなしと信せねばならぬ。又あしきこゝろをさかしくかへりみずとは、如何なる惡凡夫でも惡きこゝろに目をかけて、是では助かるまいかと、はからふは自力のはからひ故、夫も捨てねばならぬ。山より高き善根も益にたゝず海より深も罪業も障り

とせず、助けたまふが阿彌陀如來の大願業力故、善もほしからず、惡も恐れなし。此味ひを存覺上人は「有善無善を論せず、自の功をからず、出離ひとへに他力にあることを明す」と御示しあらせられた、こゝの處を正信偈には「凡聖逆謗齊しく廻入すれば、衆の水の海にいりて一味なるがごとし」と仰せられた。凡とは凡夫のことで「無明煩惱われらが身にみちゝて、欲も多く、いかりはらだち、そねみねたむこゝろ、おほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とゞまらず、きへずたへぬ」者のこと。聖とは聖人で小乗では初果以上、大乘では初住以上の方を聖人といふ。この方は見惑思惑を斷じたまふ故、三惡道へは墮ちぬ身とまでならせられた御歴々なれども、彌陀の本願海に歸入するときには凡夫も聖者も同様、善人も惡人も一味の信心で、大井川の水も、淀川の水も、名もなき溝川の水も、大海に流れ込めば一つ潮となるが如しとの御示しである。

三 源信僧都が宇治の平等院に於いて、一夏九十日の間御說法をなされた。満九